2019-01-27T13:23:02.817田中康裕
日本建築学会北海道支部
研究報告集No. 87 (2014年6月)

大船渡市末崎町「ハネウェル居場所ハウス」の設計意図と使いこなしの比較
—東日本大震災被災地域の環境移行を支えるコミュニティカフェに関する研究—

正会員 ○生越 美咲*
同 森 傑**
同 野村 理恵***

5. 建築計画— 2. 施設計画
環境移行，集会所，用途転用，コミュニティ，復興，東日本大震災

1. 目的と背景

本研究は、東日本大震災で被災した大船渡市末崎町に地域住民の多世代交流の場を創造することを目指して、2013年6月13日にオープンした「ハネウェル居場所ハウス」(以下、居場所ハウスとする)の設計意図と竣工後の使いこなしを比較分析することで、被災地で計画的につくられたコミュニティカフェの地域への定着の過程と諸課題について考察することを目的とする。

東日本大震災の被災地では、仮設住宅の居住環境の向上や地域の集会施設づくり、新たなまちづくりに関する支援が継続的に行われている。居場所ハウスでは、被災者が集い様々な活動へ主体的に関ることのできる居場所づくりを目指して、震災後に計画的につくられたコミュニティカフェである。地域の住民構成や生活環境の変化の中での大きな課題となる環境移行による精神的な負担の軽減に寄与することが目指されている。

2. 居場所ハウスについて

2-1. 居場所ハウスの概要

アメリカ航空宇宙分野の「ハネウェルインターナショナル」による建設費の寄付、非営利人道支援団体「オペレーションUSA」や非営利組織「ibasyo」、大船渡市社会福祉法人「典人会」による運営補助、北海道大学建築計画学研究室による設計、「有限会社伊東組」による建設のもとつくられた。

現在、NPO法人「居場所創造プロジェクト」を中心に、月曜日から日曜日の木曜日を除く、週6日間の10:00～16:00まで運営されている。

2-2. 居場所ハウスの設計意図

(1) 立地と配置

敷地周辺には仮設住宅や今後建設予定の公営住宅、防災集団移転予定地がある。このような地域構造の変化に対応するため、年齢や震災で受けた被害などの区別がなく様々な人々が集まり活動できるような配置としている(図1)。

(2) 建設プロセス

古民家の構造を尊重し、居場所ハウスでは陸前高田市の古民家を譲り受け、フレームを再利用するという方法をとった。地元の気仙大工[注1)]の技術により、施設利用者が慣れ親しんだ家のような安心感を得ることをねらいとしている。

(3) 具体的な空間デザイン

多くの利用者が訪れ、かつ利用者が積極的に活動できるよう、設計者が施設利用の仕方を細かく規定するのではなく、利用者が思い思いに使いこなすことをねらいとして、3つの特徴がある。

図1 居場所ハウスの立地

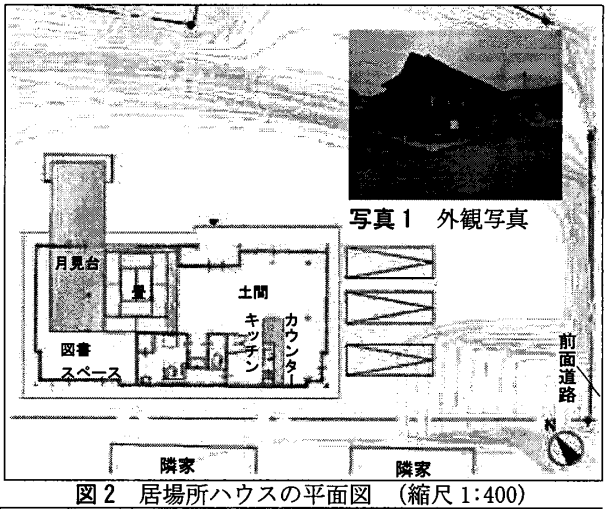

図2 居場所ハウスの平面図 (縮尺1:400)

Comparison between Design Intention and Utilization on "HONEYWELL IBASHO HOUSE" in Ofunato, Japan: Community cafe for supporting Environmental Transition of Areas Affected by the Great East Japan Earthquake

OGOSHI Misaki, MORI Suguru, NOMURA Rie

2019-01-27T13:23:02.817田中康裕

①外と中をつなぎ人を呼び込むデザイン

古民家に月見台や大開口といった新しい要素を加えることで中と外の領域を一体化を図る。そのことで、人々の活動の様子を屋外から見ることができ、地域の様々な人々が訪れやすいよう意図されている。

②ほどよい距離感で自分の居場所を選べるデザイン

様々な活動に対応できるようワンルームで柱によりゆるやかにつながる空間としたうえで、テクスチャーなどの違いによりそれぞれの場所に明確な領域をもたせ、利用者が自分の居場所を発見できるよう意図されている。

③利用者が自らしつらえるデザイン

民家の再利用という手法により、自分の家のような安心感から利用者が建築にしつらえを加えやすいよう意図されている。

本稿では居場所ハウスの地域への定着、つまり使い慣れて行く過程とその際の諸課題を議論するため、③を取り上げ利用者が居場所ハウスをどのように使いこなしているのかという観点に注目した分析を行う。

3. 調査概要

設計意図に照らした利用実態への反映を把握するため、以下3つの調査を実施した。コミュニティカフェの地域への定着の過程を把握するには利用実態を経年的にとらえる必要があると考え、2013年7月と9月に調査を行った。詳細を表1に示す。

表1　調査方法

	ヒアリング調査	行動観察調査	実測調査
調査実施日	2013年7月15, 16日 2013年9月23, 24日	2013年7月17, 18, 20, 21日 2013年9月25, 27, 28, 29日	2013年7月15-21日 2013年9月23-29日
調査内容	運営時間（10:00～18:00）に居場所ハウスへ訪れた利用者すべてを対象とし、来訪者の基礎情報や居場所ハウスの利用状況についての質問を行う。	30分おきに居場所ハウスの建物内外を巡査が流り、10分間で観察できた行動を時刻とともに平面図に記録した。	それぞれの実施日につき一週、居場所ハウスの実測調査を行い、また写真撮影により備品のレイアウトを記録した。

表2　行動分類の定義

(i) プライベート	(ii) セミプライベート
個人が自分以外の他者と関っていない状態。	複数人が集まり一緒に行動している状態。グループとして特定される。
具体的にみられた行動として、「洗い物をしている」、「座ってパソコンをしている」などといったものが挙げられる。	具体的にみられた行動として、「〈他人〉と一緒にコースターをつくっている」、「〈他人〉と…について会話している」などといったものが挙げられる。
(iii) セミパブリック	**(iv) パブリック**
複数人があくまで個人の状態を保ったまま他者と関っている状態。	公的な場に身を置くように、個人として区別されず他者と関っている状態。
具体的にみられた行動として、「洗い物をしながら〈他人〉と…について会話する。」、「〈他人〉にコーヒーを出す」などといったものが挙げられる。	具体的にみられた行動として、「ゲーム（イベント）の説明を聞いている」、「定例会議をしている」などといったものが挙げられる。

ヒアリング調査：7月と9月の調査においてそれぞれ37件、21件の結果が得られ、そのうち全質問項目で回答が得られた39件を有効数とした。

行動観察調査：7月と9月の調査においてそれぞれ48回実施し、計96回分の結果が得られた。

実測調査：7月と9月の調査においてそれぞれ6回、計12回分の結果が得られた。

4. 調査結果

2-2で述べたように、居場所ハウスでは、利用者が他者とほどよい距離感をとることで自分の居場所を見つけることを意図している。このため対人距離やパーソナルスペースの概念をふまえ他者との関り方の状態による程度を定義し、行動観察調査で記録した行動の分類を行った。表2に4つの分類と具体的な行動の例を示す。また、それぞれの分類の行動分布を図3に示す。

ⅰ）**プライベート**は、屋内外全体に広く分布している。土間とキッチンに多く、図書スペースや月見台への分布は少数である。

ⅱ）**セミプライベート**は、屋内全体に広く分布している。土間とキッチンでの分布が多いが、7月では図書スペースでの分布も確認できる。また、9月の分布では屋内外へと分布が広がっている。

ⅲ）**セミパブリック**は、土間からキッチンへの分布が多く、他の部分ではほぼ分布が見られない。また7月と9月での大きな差異は確認できない。

ⅳ）**パブリック**では、7月では分布が無いが、9月では、屋内全体に広く分布している。

以上より図書スペースや月見台、屋外は比較的プライベートな空間であることに対し、土間やキッチン、畳ではプライベートな使いこなしだけでなく他の利用者と気軽に交流できるなど多様な使いこなしがみられる。

本稿では居場所ハウスの地域への定着の過程について議論するため、時期により変化した使いこなしに注目し設計意図との比較分析を行う。

5. 分析

5-1. 居場所の選択

居場所ハウスでは、2-2(3) ②で述べたように、様々な活動への対応や利用者の居場所の発見を目指して、柱でゆるやかにつながるワンルーム空間とし、テクスチャーの違いによりそれぞれの場所ごとに領域性を持たせるデザインをした。

図3より7月ではみられなかったパブリックという使いこなしが9月ではみられた。これは主にイベント時での使いこなしであるが、視線が通る

2019-01-27T13:23:02.817田中康裕

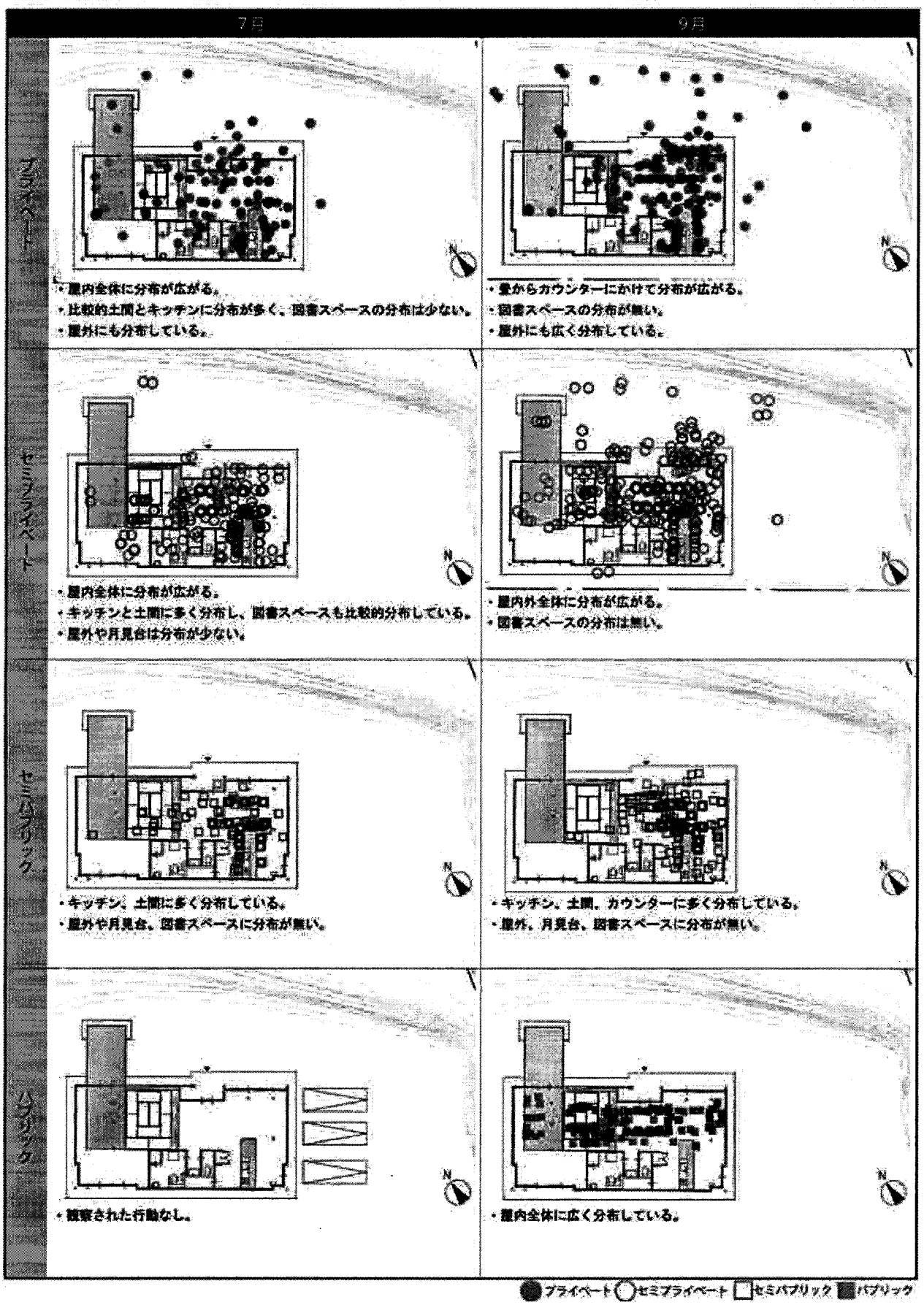

図3　他者との関り方のパターンの分布

2019-01-27T13:23:02.817田中康裕

屋内全体に分布している。このことにより居場所ハウスがイベントという非日常の活動に対応しており、ゆるやかなワンルーム空間が機能しているといえる。また、9月ではプライベートやセミプライベートの分布が7月より多くカウンターと屋外に分布している。この一因としてイベント時に居場所のないと感じる利用者が、少し離れた場所からイベントの様子を見ているという状況が考えられる。利用者は刻々と変化する状況に応じて、場所の明確な領域性により居場所を選択している。しかし、実測調査の結果において運営側の領域であったカウンターにおけるプライベートの分布の増加は、運営に携わる人々の利用が多く、利用者が固定化されている傾向がある。さらに、9月では図書スペースの分布が全パターンにおいてみられない。7月に子どもに利用されていた図書スペースの分布が9月にはみられないことや、ヒアリング調査の結果（7月よりも9月の子どもの利用者が少ない）をふまえると利用者の属性に偏りが生じているといえる。利用者の固定化や属性の偏りは、2-2(1) で述べた、区別なく人々が集える場所にするという意図に必ずしも合致していない。

5-2. 中と外の一体化

居場所ハウスでは、2-2(3) ①で述べたように人々の活動の様子が屋外から見え、利用者の屋内への入りやすさを目指して、古民家に対して月見台や大開口という新しい要素を加えることで中と外の領域を一体化するデザインとした。

図3より9月ではプライベートやセミプライベートで屋外空間への分布が広がっている。5-1でも述べた屋外のイベント時の利用やその他日常の利用において、利用者の居場所となっていることは屋内の状況と相互に関係していると考えられる。このことにより、大開口や月見台といった新しい要素が機能しているといえる。

5-3. キッチンと土間の連続性

居場所ハウスでは、利用者がサービスを受けるだけでなく主体的に活動に関ることを目指して、キッチンを土間に対して垂直に配置しキッチンの床を土間と同じテクスチャーにすることで土間とキッチンに連続性を持たせた。

図3よりキッチンや土間は主にプライベートからセミパブリックまで多様な使いこなしがみられる。プライベートな空間でもあり、かつ個人で何か作業をしながら他の利用者と気軽に交流ができる場所であることはキッチンと土間の連続性と関ってくると考えられる。そのことでキッチンと土間の間に人々の視線を遮るものがなくなり、キッチンで作業しているサービス提供側の人々と土間で過ごしている利用者とが物理的に遠い距離でも気軽に交流することができる。

6. まとめ

以上の分析により、本研究では設計意図に対する利用者の使いこなしについて以下3つのことがいえる。

①利用者は設計段階で意図された通りに、居場所ハウス内での様々な状況や活動に対して、ほどよい距離感で他者と関りながら自分の居場所を選択している。しかしながら、9月には利用されなくなった図書スペースなどのように、利用者の固定化や属性の偏りが少なからず生じている。

②利用者は屋内の活動状況に応じて屋外を使いこなしており、これには積極的に屋外へ開いている大開口などの新しい要素による効果であると考えられる。また、このことは利用者に屋外での滞在という選択肢を与えており、屋内の人々とほどよい距離感を生み出している。

③セミパブリックの状態において、キッチンと土間の連続性により生まれる気軽な交流が、他者とほどよい距離感を生み出している。

以上より、居場所ハウスは訪れた利用者がそれぞれ思い思いに過ごせる場所であり、利用者の様々な使いこなしを許容する場所である。このような場所は、これから住民構成や生活環境が変わっていく地域が新たな環境に馴染んでいくうえで重要な存在である。一方で利用者の固定化や属性の偏りが生じている状況は、地域のための場でなく一部の利用者の場となり、新たに住民構成に加わった人々にとって訪問しづらい場所になってしまう。このことは地域構造の変化に対応していく場所としてそぐわない課題である。

今回は主に行動観察調査の結果により他者との関わりの視点から滞在の仕方の使いこなしについて分析を行い考察した。今後は、物のしつらえを記録した実測調査や利用者の属性と頻度などを記録したヒアリング調査の結果を相互に交えながら分析を重ねる。また、調査時期の比較からも有為な結果が得られたため、環境移行の視点より、さらに経年的に調査・分析を進める。

注釈

注1) 岩手県気仙郡地方（現在の岩手県気仙郡と、陸前高田・大船渡の両市を含む旧気仙郡を指す）の大工。

* 北海道大学大学院工学院　修士課程　Graduate Student, Graduate School of Eng., Hokkaido Univ
** 北海道大学大学院工学研究院　教授・博士（工学）　Prof., Faculty of Eng., Hokkaido Univ., Ph.D. in Eng.
*** 北海道大学大学院工学研究院　助教・博士（学術）　Assis. Prof,, Fuculty of Eng., Hokkaido Univ., Ph.D.